



# 安蔵 つうしん

## No.27「鈴木安蔵を讃える会」ニュース

発行：2024(令和6)年 8月30日(金)

〒979-2533 福島県相馬市坪田字八幡前21

(「鈴木安蔵を讃える会」会長) 志賀勝明

TEL: 024-26-2625 FAX: 024-26-2626

### 会員さんの作品より

宮城県仙台市の会員、佐藤洋子さんらが発行している機関誌『a, s(あ,ず)』Vol.47 V(2023.2)より佐藤さんのエッセイを転載させていただきました。



### ◆エッセイ

#### 憲法学者鈴木安蔵と

父餘生さん 1 佐藤洋子

東北福島の浜通りにある小さな町である小高は、作家島尾敏雄や埴谷雄高との縁はよく知られている。けれど、憲法学者鈴木安蔵の出身地であることはあまり知られていないようだ。

鈴木家は、苗字帯刀を許された相馬藩の商人で林業局を営んでいた。避難指示が出された東日本大震災後は国登録有形文化財として「鈴木安蔵を讃える会」によって保存活用が考えられている。

安蔵の父鈴木良雄は俳人餘生、母ルイは薩摩藩士の娘である。父は1904(M37)年2月12日に亡くなっている。安蔵は父が亡くなった二十日後の3月3日に生まれた。なので、父の顔を見ていない。安蔵は後に旧制二高から京都帝大へ進むが学連事件に初めて適用された治安維持法で検挙、獄中生活を経験し憲法学者を志すことになる。

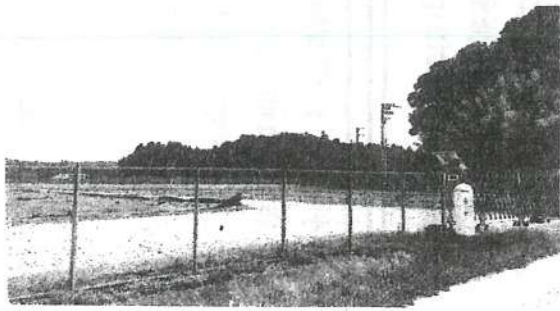
安蔵の父は俳人であり、しかも自身が生まれる前に父

が亡くなっていることを考えると、どんな情緒的感性を秘めていたのだろうかと思像する。

そのとき父のいない安蔵に寄り添ったのが駒村だといふ。一人は小高銀行で机を並べ共に支配人代理を務めた。本名大曲省三(1882年〜1943年)、俳人駒村だ。後に二人は齋藤草加を誘い小高に俳句グループ『渋茶会』を結成。餘生の死後の1906(M39)年には『浮舟会』をつくる。

餘生は1902年7月に咯血すると職を辞しその後は井田川のとおり行津字鳥木迫に転居して療養する。そのあたりを歩いてみると、「県営圃場整備事業浦尻地区竣工記念」の碑が立っていた。ところどころに湿地があり一帯は、浦だったことがうかがえる。どこまでも見渡せて何もなく、国道6号が横切る先に水平線が広がる。餘生さんが療養したころはもつと寂しい場所だったろう。そんな場所にある庵で餘生は生涯の友駒村と挿雲と過ごした。その4日間が挿雲の美しい追悼文を世に残すことになる。〈裏の面に続く〉

が亡くなっていることを考えると、どんな情緒的感性を秘めていたのだろうかと思像する。



◀鈴木餘生が療養した小高区南地区の井田川浦は、やがて干拓され田んぼとなる。現在は広大な放射能除染土置場跡となっています。